

◆飛鳥地域の再開発直前の土器

1990年、雷丘の東方150mで、東西幅110mを越える沼状地形とそれを石組暗渠を設置しながら埋め立てた大規模な整地の跡が発見された（山田道第2・3次調査『藤原概報21』1991）。

近年、奈良時代の小治田宮の発見を承け、推古朝の小墾田宮をも雷丘周辺に推定する説が提起され、この整地はその重要な根拠とされている。

図70の1～21は整地の西端、南北に整形された地山に沿って堆積した、整地以前の土層－黒褐色土層出土の土器である。土器は少量ではあるが、それでも飛鳥寺の造営が始まった588年以前に限定できる「飛鳥寺下層」資料が、『飛鳥寺発掘調査報告』（1958）所載の須恵器杯Hと蓋各1点の実測図であることからすれば、質量ともにそれを補うにたる内容をもつ。

「飛鳥寺下層」発見後、40数年を経て、豊浦寺下層、飛鳥寺西回廊基壇、飛鳥寺南方石敷広場下層など、遺跡変

遷の理解と出土状況から年代を推定できる資料も、それぞれ数点ずつながら増えてきた。併せて飛鳥地域の再開発時の姿を探る手だてとしたい。

黒褐色土層の土器には、土師器杯G、杯H、甕、鍋、須恵器杯H、甕、壺等がある。しかし「飛鳥I」を特徴づける金属器模倣の器種－土師器杯Cや須恵器杯G・杯Bは1片もない。その点で整地土の土器との違いは明確である。

土師器杯G（9～14）には多様な口縁端部のものがあり、土師器杯H（15・16）は底部のケズリが狭く、口縁部との間に鋭い稜が付かない。これらは古相の飛鳥Iに受け継がれる。土師器甕（17～21）は、旧小墾田宮推定地SD50最下層資料に似た直立気味の口縁部をもっている。

須恵器杯H（1～8）は立ち上がりの形状は多様ながら口径（蓋あるいは身の蓋があたる部分の直径）14cm前後で底部ヘラケズリが大半を占める。口径14.5cm前後の飛鳥寺下層（22・23：1983年再測）より新相を示す。

この時期、須恵器杯は口径、立ち上がりの縮小とヘラケズリの省略の方向に変化する。口径12.5cmの24、25は小さな立ち上がりで底部ヘラケズリ。それぞれ飛鳥寺の西回廊基壇、南石敷広場下層から出土した（『藤原概報13・15』）。飛鳥寺回廊の完成は592年。形態手法の上でも飛鳥Iに共通点が多い。豊浦寺講堂下層の掘立柱建物以前の土層から出土した須恵器杯H（27）は口径14cmで底部ナデ調整。建物が豊浦宮と関わるならば、西暦593年以前。土師器杯C（28）は建物廃絶後で講堂以前の土器。須恵器壺（26）、土師器杯H（29）も講堂以前（『藤原概報16』）。

ともに592、593年以前と推定される飛鳥寺西回廊の須恵器杯H（25）と、豊浦寺下層の27との違いは明確である。どちらがどれだけ、その年代に近いのか。そして、その向こうに「黒褐色土層」の土器、「飛鳥寺下層」がある。上層・埋土資料が「飛鳥I」の標式資料となっている旧小墾田宮推定地SD50の評価を含めて検討を続けたい。（西口壽生）

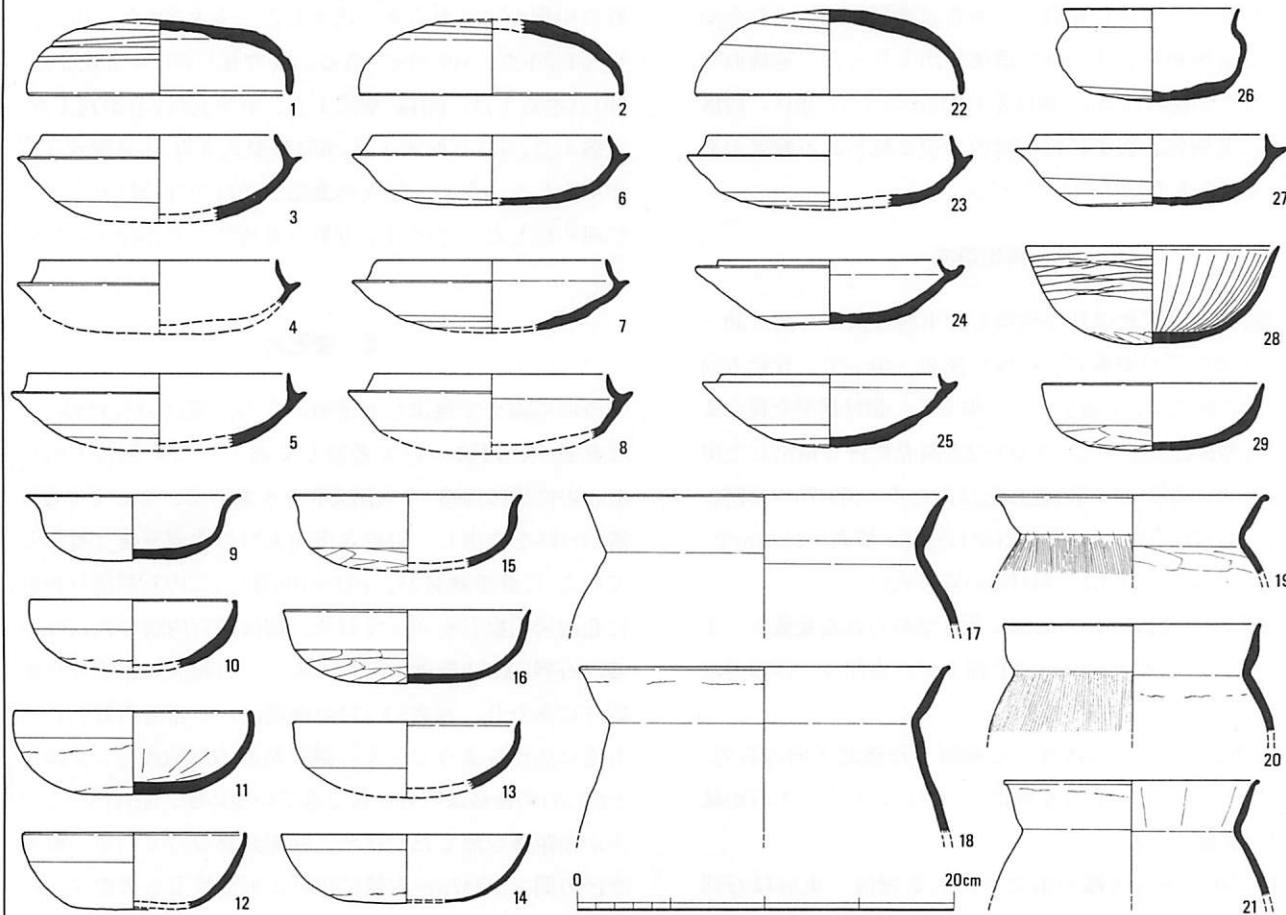


図70 山田道第3次調査出土土器（付 飛鳥寺下層・豊浦寺下層） 1:4